

第71回石川県へき地複式教育研究大会奥能登大会 実施報告書



令和7年11月11日

穴水町立向洋小学校

第71回 石川県へき地複式教育研究大会 奥能登大会

《全国・石川県研究主題》

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」
～児童生徒一人一人が他者につながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

1 開催日時

令和7年11月11日（火）13：30～（13：10受付）

2 大会会場

穴水町立向洋小学校

＜学校概要＞

校名の通り奥能登の玄関口である穴水町の中居湾を望む高台にあり、自然豊かな場所に位置する全校児童36名の学校である。平成20年4月に、諸橋小学校・兜小学校・鹿波小学校・住吉小学校の4校が再編され向洋小学校となった。今年度は、完全複式学級である。



3 大会の日程

13:10 13:30 14:15 14:25 15:20 16:20 16:25

受付	公開授業	移動	全体会	講演会	閉会行事
----	------	----	-----	-----	------

4 大会内容

（1）公開授業 （各教室 13：30～14：15）

学 年	教 科	単 元 名	指 導 者
1・2年	算 数	1年生：ひき算 2年生：かけ算	松井 良之
3・4年	算 数	3年生：円と球 4年生：垂直と平行	小路 笑美子
5・6年	算 数	5年生：単位量当たりの大きさ 6年生：比例と反比例	松中 貴裕

(2) 全体会 (ランチルーム 14:25～15:20)

- | | | | |
|--------|---------------|-------|-------|
| ・開会挨拶 | 石川県へき地複式教育研究会 | 会 長 | 富水 知子 |
| ・祝 辞 | 石川県へき地複式教育振興会 | 会 長 | 野口 弘 |
| ・祝 辞 | 穴水町教育委員会 | 教 育 長 | 大間 順子 |
| ・表 彰 式 | | | |
| ・研究発表 | 穴水町立向洋小学校 | 研究主任 | 松中 貴裕 |
| ・講 評 | 奥能登教育事務所 | 指導課長 | 中村 光宏 |
| ・謝 辞 | 穴水町立向洋小学校 | 校 長 | 角間 雅之 |

(3) 講演会 (ランチルーム 15:20～16:20)

- ・演 題 個が活きる授業を目指す～学びの基盤づくりを通して～
- ・講 師 加藤 隆弘 氏 (金沢大学教職大学院 准教授)
- ・概 要

今後の少子化と地域の実態を踏まえて、一人一人の力を積み上げ、未来への「可能性」をプレゼントしなければならない。そのためには小規模校での基盤づくりや、授業方法の工夫が必要である。少人数や複式学級の基盤として、低学年から高学年の6年間を貫く意図的な「鍛え」が大切である。複式授業では、学びの見通しをもたせ、自分たちで「できる・分かる」を実感させることが大切であり、教師の支援のあり方として「適度な不親切」がポイントとなる。また、次期学習指導要領審議過程では、「自らの人生を舵取りする力」と「民主的で持続可能な社会の創り手」の育成を検討している。そこで、『質の高い探究的な学び』は、これからの社会と教育課題の全体につながるテーマであり、授業では「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む」児童生徒を目指したい。そのためにはこれまでの「当たり前」を疑い、思い切って変え(チャレンジし)てみたり、児童生徒の主体性が当たり前発揮できる機会、つまり「委ねる」場面を増やしたりして学びの質的向上を図る。



<穴水町立向洋小学校の研究実践>

「全員が」分かる! 「全員で」分かる! 授業づくり
～考動タイムの充実・学習リーダーの育成を通して～

1 主題設定の理由

本校の児童の課題として「問われていることに対して適切に表現することが苦手である」ことが挙げられる。また、学力調査等の分析からも題意を的確にとらえることが苦手なことや、語彙力や文末

表現が十分に身につけていないことが明らかになった。このことから、授業の中で自発的な問いをもたせたり、曖昧な表現のままで終わらない指導をしたり、児童のアウトプットの機会を増やしたりすることが必要であると考えた。

そこで、これらのことを踏まえ、本年度の研究主題を「全員が」分かる！「全員で」分かる！授業づくり。研究副主題を～考動タイムの充実・学習リーダーの育成を目指して～と設定した。

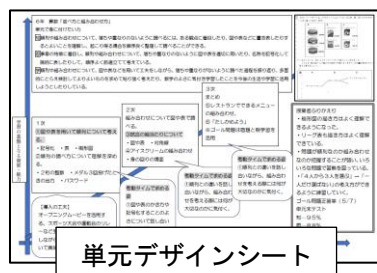
2 研究の仮説

向洋小学校では、「分かる」を①解き方が分かる（理解）、②自分の力で問題が解ける（定着）、③説明することが出来る（言語化）、④問題が変わっても出来る（応用）、⑤まとめを考えられる（まとめ）と捉えている。児童全員がこのような姿になるには、児童が学びの方法等を自分で選択し、対話により考えを深める時間【行動タイム】を充実させれば、児童はより主体的に学び自己調整力が育つだろう。また、複式学級のわたりの授業は、教師の直接指導の時間は少なくなるが、自分たちで学習を進めることで、自ら学び考える力を育成するチャンスでもある。つまり、【学習リーダー（児童同士の考えをつなぐファシリテーター）】を育成することで、児童のより主体的な学びへとつながると考えた。

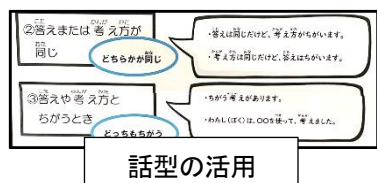
3 研究の概要

（１）考動タイムの充実

考動タイムでは、一人で考える時間や友達と考える時間が明確に設定されていない。また、ノートや端末、ホワイトボードなど、考え方も自由であり、「いつ、だれと、どうやって」考えるのかを、児童自身が自分に合った学び方を選択することで、主体的な学習態度の育成を図っている。



とともに、これまでの学びがつながり、学びが「点」から「線」になると考える。3つ目の話型の活用では、主に低・中学年が活用しており、基礎的な話し方を身に付けることは、論理的な話し方を身に付けるとともに安心して話すことにつながると考えている。4つ目の相互



その手立てとして、1つ目の単元デザインシートは、単元のまとまりで授業設計をしていくことで、児童にどこでどのような力をつけていくのか、どの時間を子どもに委ねるのか、こういった姿を目指しているのかを明確にする。2つ目の既習揭示は既習を揭示することで、児童自身で学びを進める助けになる



授業参観では、上級生の学び方を見学することで、低学年はよい学び方をまねしようという意識が高まる。また、自身の学び方を振り返る機会ともなり、学びのメタ認知を促すことにもつながった。

（２）学習リーダーの育成

本校では、学習リーダーを育成することで、児童のより主体的な学びへとつなげようと考えており、目指す学習リーダーは、児童の考えを引き出し、児童同士の考えをつなぐファシリテーター

[illegible]

授業スタイルの共有化

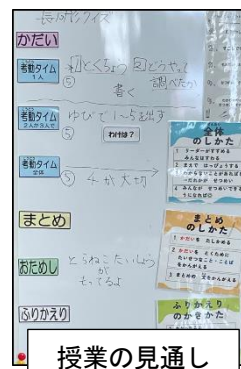
ボードに示すことで、学習スキルの型を学んでいる。高学年では、時間配分のみを示しているが、児童は必要に応じて時間配分も自分たちで変更するようになってきた。3つ目の**児童へのフィードバック**では、よかった点や今後のアドバイスを書き合うことで、自身の学び方を見直す機会になったり、考動タイ



学習リーダーの授業

ムで目指す姿を考え直したりすることができ

た。4つ目の**学習リーダーを中心とした授業実践**では、基本的には全員が日替わりで学習リーダーを経験していく。学習リーダーを中心として授業を行うことで、リーダーシップや協調性の育成につながっていると考える。



授業の見通し

(3) 学びを支える土台づくり

考動タイムや学習リーダーがしっかりと機能するために、土台となるであろうと考えていることが3つある。1つ目の**学習を支える人間関係づくり**では、児童同士の学び合いを充実させるためには、良好な人間関



エンカウンター

係が大切になる。そこで、朝学習にエンカウンター活動を取り入れたり、毎日の朝の会にスピーチ



金沢大学との連携

タイムを設定したりすることで、お互いのことを理解し合うことができるようにしている。こうして、安心して話することができる雰囲気づくりを目指している。2つ目の**教師の授業力向上**では、複式の授業を実施していくには教師の授業力向上は欠かせない。そこで、

金沢大学との連携 外部講師や指導主事要請訪問を活用し、複
式授業の行い方や学習リーダーの育成に向けて研修を行った。3つ目の
基礎学力の向上では、朝学習や昼のスキルタイムを活用し、計画的に学習
に取り組んでいる。また、毎学期ごとに漢字計算コンテストに取り組んだ
り、家庭学習の手引きを活用したりすることで基礎学力の向上を図っている。

朝学習&スキルタイム

	月	火	水	木	金
朝学習 8:10 8:20	読書	算数 (基礎)	仲良し タイム	国語 (基礎)	読書
スキル タイム 8:30	国語	算数	タイピング	国語	理科

基礎学力の向上

基礎学力の向上

4 成果と課題

<児童アンケートの結果>

児童アンケートの結果から、友達と協力して課題を解決することを楽しんだり、友達の話すことに対して反応や質問をしたる意識が大きく高まっていることが分かる。これは、考動タ

	4月	10月
①学習がよく理解できている	96%(61%)	92%(61%)
②友達と協力して課題を解決することが楽しい。	85%(45%)	94%(67%)
③自分たちで学習を進めることができている。	94%(61%)	94%(67%)
④みんなの前で安心して発表することができる。	82%(52%)	83%(47%)
⑤友達の発表（話）を聞いて、反応や質問ができる。	85%(27%)	92%(50%)

イムを授業の中で確実に設定し、協働的な学びや児童主体の授業を促してきた成果だと考えられる。

しかし、一方で、まだ、発表したり話したりすることに対して緊張したり苦手意識のある児童は一定数いることも分かった。

<成果>

成果として、主体的に行動する児童数の増加、授業中のアウトプット量の増加が見られた。また、対話の中で、きちんと算数用語を用いて説明したり「分からない」ことをしっかり言えたりできるようになってきたことで学び合いの質も向上してきた。



また、学習リーダーの育成をしていくことで、主体的に学習に取り組むことができるようになっただけでなく、効率のよい間接指導が行えるようになり、支援が必要な児童への関わり方や課題が見えやすくなった。最後に、単元デザインシートを作成することで、教師の指導力向上にもつながった。

<課題>

課題としては、まだ表現力が十分ではない児童も一定数いることが挙げられる。相手により分かりやすい説明ができるように、算数用語を適切に用いて表現したり、話す順序や声の大きさ、文末表現を工夫したりしながら説明できるように指導を継続していく必要がある。

また、現在育成に取り組んでいる学習リーダーの質をさらに高めたり、教師自身が研鑽に励み「見取り力」や「個別対応力」を向上させたりすることも必要である。最後に、これからも児童数の減少が見こまれる中で多様な考えに触れられる工夫をしていくことも大きな課題であり今後も継続して研究していきたい。

